

## 短期大学と附属幼稚園との連携

—22年度の取り組み—

杉原 徹, 小島 一久

高知学園短期大学紀要 第41号 別刷 (平成23年3月)

Reprinted from Bulletin of Kochi Gakuen College, No. 41 (March, 2011)

報 告

## 短期大学と附属幼稚園との連携

### —22年度の取り組み—

杉原 徹<sup>1\*</sup>, 小島 一久<sup>2</sup>

要約：本稿は、22年度の高知学園短期大学と附属高知幼稚園との連携の取り組みに関する報告である。21年度の課題をふまえて、大学と附属幼稚園との意見交換会を22年3月に、教育実習事前指導としての研究保育実践を4～5月に、教育実習事前事後指導を6・7月に、1年生を対象とした観察実習と夏期ボランティアを7～8月に行った。教育上の連携については多くの点で改善され、学生自身もその取り組みを高く評価している。一方、研究上の連携についてはいまだ不十分な状態にとどまっている。教育上の連携をさらに強化するとともに、事例研究の方法論を大学・幼稚園で確立させ、研究上の連携を改善させていくことが今後の課題である。

キーワード：短期大学，附属幼稚園，教育実習事前事後指導，研究保育，事例研究

#### はじめに一本稿の趣旨

本稿は、22年度の高知学園短期大学（以下、本学と略記）と附属高知幼稚園との連携の取り組みに関する報告である。本紀要第40号において、我々は「保育者養成校と附属幼稚園との連携のあり方に関する研究 教育実習事前指導重点化のための試みを通して」（杉原・小島，2010）を発表した。大学・附属保育施設が、目指す保育者像として「総合的保育者」を掲げ、協働して保育者養成カリキュラムを研究開発しようというお茶の水女子大学の「幼・保の発達を見通したカリキュラム開発プロジェクト」（お茶の水女子大学「幼保プロジェクト」，2008，2010）を取り上げ、その試みを一つの手がかりとしながら本学と附属幼稚園との連携のあり方について検討した。具体的には、21年度

に実施した教育実習事前指導としての研究保育実践の取り組みを取り上げた。本稿は、そこでの問題意識を継続、発展させようとするものである。

我々は、21年度の取り組みで見出された課題として第一に「研究保育実践をより効果的にするためには、大学・附属幼稚園による協働的な計画性が極めて重要であること。具体的には、事前の観察実習機会の確保、事前事後指導体制の整備などである。」、第二に「研究保育を計画する前提として大学・附属幼稚園が保育者養成のあり方・目指す保育者像などについて協働的に構想する必要があること。附属幼稚園側から提案された事例研究などが構想の場として考えられる。」としてまとめた。22年度はこれらの点を意識して連携の深化を目指した。以下、取り組み内容を時系列順に取

<sup>1\*</sup>高知学園短期大学 幼児保育学科 E-mail: sugihara@kochi-gc.ac.jp

<sup>2</sup>高知学園短期大学 看護学科 E-mail: ojima@kochi-gc.ac.jp

り上げていく。

#### 1. 大学と附属幼稚園との意見交換会—22年 3月

22年度の取り組みをスタートさせる前に、21年度の取り組みあるいはこれまでの取り組みを総括反省する目的で22年 3月30日に短大中会議室にて大学と附属幼稚園との意見交換会を実施した。このような集会自体が平成 8年の高知幼稚園の附属化以降初めてのことである。参加者は我々の他に短大幼児保育学科の教員 5名と附属幼稚園の園長、教諭 3名であった。

当日は、第一筆者が作成した右のような参考資料を参加者に配布した。この資料をもとにしながら、最初に第一筆者が大学と附属幼稚園とのこれまでの教育・研究上の関わりを整理した。幼児保育学科における幼稚園教諭二種免許状取得のための学外実習の実習生人数、実習事前指導の概要、心理学・音楽などの教科目における関わり、他学科における関わりを報告し、その後、自由に意見交換を行った。

教育上の関わりについては幼児保育学科の教育実習に関する話題が中心となった。幼稚園側からは「近年の実習生は真面目に取り組んでおり、特別注意するようなことはないが、澁刺さに乏しい」という意見があった。「実習事前指導として、21年度の研究保育実践は効果的だろう。一部の学生でもこうした経験をし、他の学生の心構えにもなるのならば、継続するのが望ましい」や「教育実習に限らず、様々な実習に向けて、事前に子どもと実際に関わっておくことは重要になるので、1年次からどんどん幼稚園を訪問する機会をつくってはどうか」という意見も出た。

研究上の関わりについては、現時点では皆無に近い状態であり、幼稚園で行っている事例研究への短大教員の参加などについて要望が出た。事例研究については「はじめに」で述べた課題の二番目に関わることである。「研究保育を計画する前提として大学・附属幼稚園が保育者のあり方・目指す保育者像などについて協働的に構想する必要があること」をあげ、その構想の場の一つの例と

#### 参考資料

※近年の短大と附属幼稚園との教育・研究上の関わり

〈幼児保育学科〉

- ・学外実習（観察実習 例年約25名、  
教育実習 例年約 8名）

・実習事前指導

（1年生 前後期 1回ずつ幼児とのふれあい、  
2年生 教育実習前に代表者による設定保育）

・心理学調査

・劇発表

・合奏

〈生活科学学科〉

・お弁当実習

〈歯科衛生専攻〉

・歯みがき指導（「健康教育」の一環として）

※附属幼稚園の教育方針・めざす子ども像

〈教育方針〉

子ども達の輝かしい未来を願い、一人ひとりが、自ら気づき、自ら考え、自ら判断して行動することのできる生きる力の基礎を養うと共に、心身ともに健康でたくましい子ども、物事に感謝できる子どもを育成します。

〈めざす子ども像〉

たくましい子 思いやりのある子 よく考える子

※幼児保育学科の教育目的・教育目標

幼児たちの集団生活における教育者・指導者に必要な知識と技術を学ぶ。愛情に満ちた豊かな人間性を持つ保育者の育成を基本に、小人数クラスでの授業や附属幼稚園などでの豊富な実習などの体験をとおして、実践力を養う。

して事例研究をあげておいた。この意見交換会の場では、大学・附属幼稚園が連携した事例研究を22年度の目標とすることとした。

その他、参考資料に従って附属幼稚園の教育方針・めざす子ども像と、本学幼児保育学科の教育

目的・教育目標をあらためて確認した。附属幼稚園の教育方針・めざす子ども像にそった教育・保育を実践することができる保育者養成に向けて幼児保育学科が取り組んでいくといった関係性が当然ながら求められる。この点、大学・附属幼稚園が連携を進めていく上で常に意識しておかなければならない。

以上のような意見交換会をふまえて、22年度の取り組みをスタートさせた。

## 2. 22年度の研究保育実践—22年4～5月

21年度同様、22年度も教育実習事前指導として研究保育実践を行った。概要としては21年度と同様である。4月当初に本学科2年生77人に21年度の取り組みをビデオ記録とともに紹介し、今年度の取り組みについて計画を立てた。各クラスで2人1組グループの希望を募ったところ、Aクラス2グループ、Bクラス1グループと決まった。附属幼稚園と相談し、以下のような計画を立てた。

### <担当クラス>

- A1グループ：年長あかばら組  
(男児14名 女児8名 計22名)
- A2グループ：年中あかゆり組  
(男児10名 女児8名 計18名)
- B1グループ：年中しろばら組  
(男児15名 女児10名 計25名)

### <実習日程>

- 5月10日(月) 午前10時半から降園までの観察  
B1グループ
- 5月11日(火) 午前10時半から降園までの観察  
A1・A2グループ
- 5月12日(水) 登園から降園までの観察  
A2グループ
- 5月17日(月) 午前10時半から降園までの観察  
B1グループ
- 5月18日(火) 午前10時半から降園までの観察  
A1・A2グループ
- 5月19日(水) 登園から降園までの観察

## A2グループ

5月27日(木) 研究保育

## A1・A2・B1グループ

観察実習を終えたところで各グループが指導計画を立案し、事前に幼稚園を訪問して担当教員の指導を受けた。その上でA1グループ「メダル製作」、A2グループ「梅雨の貼り絵製作」、B1グループ「カタツムリ製作」の活動を行った。

研究保育実践について、21年度は取り組み後に以下の4点を課題としてあげた。「観察実習の回数の問題」、「実践者の人数の問題」、「附属幼稚園との協働という視点」、「研究保育の到達度を振り返るための方法」である。これらの課題と照らし合わせながら、22年度の取り組みを振り返ってみる。

### (1) 観察実習の回数の問題

21年度は4グループが各2回の観察実習を行い、その上で指導計画を立案し実践した。問題点としては観察実習の回数が少なかったこと、観察実習の期間が大幅にあいてしまったことであった。21年度の取り組みでは4グループ中2グループは1回目と2回目で2週間、また2回目の観察実習から研究保育実践までさらに2週間あいてしまった。ここまであいてしまうと、実習生にとって子ども・クラスの把握が難しくなり、指導計画の立案・実践に際し大きな障害となってしまう。

22年度はこの点を改善するよう試みた。実習期間が大幅にあかないように配慮することはできたが、観察実習回数については他の授業との関係上A1、B1グループは現状維持の2回にとどまり、A2グループのみ履修科目の関係上4回実施することができた。観察実習の回数は学生にとって多いほうが良く、A1グループからは「実践場面で実際に子どもたちの名前を呼びかけることができると進めやすくなるので、名前を覚えられぬぐらいになっておきたかった」というコメントがあった。一方、4回の観察実習を行ったA2グループからは「子どもたちの名前を覚えることができ

いたし、クラスの雰囲気もつかめていたので、落ち着いて実践することができた」とコメントがあった。

短大のカリキュラムの制約上、観察実習の回数を増やすためには前年度中に組み込む必要性をあらためて感じた。4～5月は6月の教育実習期間分(4週間分)の補講がたくさん入ってくる。観察実習の日程の問題は主に短大側に制約があるので、前年度中にきちんと調整しておかなければならない。

## (2) 実践者の人数の問題

21年度は4グループ8人の学生が実践したが、実践者の人数の少なさを課題として取り上げた。学生68人中8人は確かに少ないといえる。ところが、22年度は学生77人中3グループ6人ということで、人数的にも割合的にもさらに減少している。実践希望者がいなかったということが原因であるが、22年度の取り組みを通して3グループ程度がむしろ適当であるように思われた。というのは、研究保育後に学内でビデオ記録を見て実践内容を検討する機会を設けており、21・22年度と2コマ分(90分×2)を確保しておいたが、21年度は4実践一つ一つを十分に取り上げることができなかった。活動の導入部分などポイントをかなり絞っての鑑賞となった。鑑賞後に実習生と他の学生が質疑応答をするような時間はなかった。22年度は2コマ連続で時間を確保し、3グループということで1グループに約60分の検討時間を割くことができた。活動の導入・まとめ部分の他に、実習生があらかじめ他の学生に検討してもらいたい場面をいくつか選び、ビデオ鑑賞後にコメントを出してもらった時間を取ることができた。たくさんの学生に実践経験をさせることも重要だが、研究保育後の検討会の時間との兼ね合いがさらに重要であることを22年度の取り組みを通して理解することができた。当然のことながら、研究保育実践は、実践者のみならず、ビデオ記録を通して学習する多くの学生にとって有益な取り組みである必要がある。そのためには、一つ一つの実践につい

て十分に時間をかけて検討したほうが、実践者に対しても他の学生に対してもより大きな学習効果が期待できるように思われた。

ところで、研究保育と補完的關係にあるのが模擬保育である。22年度は前期に幼児保育学科1年次生に対して開講している第一筆者担当の「教育課程概論」の中でより多くの模擬保育の機会を設けるようにした。21年度が4グループの実践だったのに対し、今年度は6グループで実施した。時間も2コマ分から3コマ分に増やした。本学では23年度から2年次生に対し「教職実践演習」が開講される。ここでは、模擬保育を通しての実践力が重要視されている。23年度に向けて、研究保育と「教職実践演習」との關係性、補完性について十分な検討が必要になると思われる。

## (3) 附属幼稚園との協働という視点

研究保育後の反省会のあり方について、21年度は学生・幼稚園の二者間で行われたが、そこに大学側も入るべきではないかということ課題とした。三者間の反省会を通して大学と幼稚園との協働關係が強化されるのではないかと述べておいた。

22年度も21年度同様、研究保育を終えた日の夕方、実習生が附属幼稚園を訪問し(実習生は子どもたちが降園した後、授業のため一端大学に戻っていた)反省会を行ったが、そこに第一筆者が同席し、3グループいずれも学生・幼稚園・大学三者間で反省会を行うことができた。三者が同席することで、「附属幼稚園は大学側の保育者養成のための指導法の一端をうかがい知ることができるだろう」、「大学は附属幼稚園が必要としている保育者像を垣間見ることができるかもしれない。幼児を指導する際にどういった点を重視しているかが見えてくるだろう」と展望しておいたが、実際大きな成果を得ることができたように思われる。

例えばA1グループの反省会では、保育者の言葉づかいが話題となった。このグループは、いたるところで土佐弁を使用していた。大学では、子ども全体に話しかけるときは標準語、個別に話

しかける場面では土佐弁でもかまわないという指導をしている。ついつい日頃使用している土佐弁が出てしまうのも心情的には理解できるが、教師・保育者としての立場を意識するようにと指導している。幼稚園側からも同様な意見が出された。教師・保育者の役割として、郷土の言葉を大切にすることを教えるのが重要であると同時に標準語を教えることも極めて重要であるという指摘であった。この点、幼稚園・大学双方の保育者養成指導法の確認となった。

A2グループの反省会では、活動の導入について話題となった。このグループは「梅雨の貼り絵製作」を計画していた。活動の一部にあじさい製作が含まれており、研究保育はちょうど園庭にあじさいが咲くかどうかという時期に行われた。当日の朝、折り良くあじさいが咲きカラフルな色をつけていた。そこにクラス担任が着目し、A2グループに導入としてまず園庭に出て実際にあじさいを見てから保育室に戻って製作を始めたかどうかと提案した。反省会に同席した第一筆者は初耳だったがそのような経緯があったようだ。こうして指導計画にはなかった導入が加わることになったのだ。ここで幼稚園側から指摘されているのは、臨機応変の指導方法ということになる。植物の成長をはじめとする自然環境要因を保育活動に柔軟に取り入れていくこともまた保育者にとって重要な姿勢である。

B1グループの反省会では、教材研究、環境設定について話題となった。このグループは、紙皿や紙コップでカタツムリを製作する活動に取り組んだ。紙皿カタツムリはあらかじめ用意しておいた壁面に張り付け、紙コップカタツムリはそれを使って遊ぶことを計画していた。ねらいとして、「製作することの楽しさを味わう」ことを中心に構想していたようだが、実際には、紙コップカタツムリを使って遊ぶことに興味を持つ子どもたちが多かった。カタツムリを重ねて「親子カタツムリ」と楽しそうに話す子がおり、またカタツムリを床において息を吹いて動かして遊ぶ子どもも複数いた。幼稚園側からこうした点について指摘が

あり、年長児の活動として、製作ばかりに主眼を置くのではなく、むしろそれを使って遊ぶことをよく計画しておく必要があるというコメントがあった。遊びが発展するように環境を作っておくことの重要性についても指摘があった。こうした子どもの発達段階の細部にわたる把握とそれに合った指導計画の立案・実践というのは大学側で指導することは容易ではない。附属幼稚園での保育指導法の一端を確認することができた。

#### (4) 研究保育の到達度を振り返るための方法

21年度の取り組みを振り返ってみて、研究保育実践の取り組みをより効果的にするために、事後に到達度を振り返るためのプロセスを用意する必要性を課題としていた。具体的な案として「改善指導案」を取り上げた。「指導案を作成して模擬保育などを実践した後に、得られた修正点や課題を基に「改善指導案」を作成する。その過程で反省・改善点が明確になり、指導案作成の力量を身につけることが期待できる」としていた。

22年度は、学生・幼稚園・大学三者間の反省会の後、3グループそれぞれに取り組みの総まとめとして「改善指導案」の作成を課した。学内での検討会で、ビデオ鑑賞、質疑応答等が一通り終わった後に、他の学生に「改善指導案」を示した。

「改善指導案」について、B1グループの学生からコメントがあった。

「研究保育を体験してみて、自分たちのねらいとしていたことと、子どもたちの興味・関心が大きく異なっていたことがわかった。事前にもう少しクラスを観察する機会が欲しかったということもあるが、発達段階の学習の必要性をあらためて感じた。研究保育後の反省会で附属幼稚園の先生、大学の先生からコメントをもらう中で子どもの発達に見合った教材研究、環境設定の必要性がわかった。反省点をふまえて今一度指導案を立案し直すことにより、計画不足だった点を見つめ直すことができたように思う。これまでの実習で、改善指導案を作成したことはなかったが、今回作成してみて次の機会に生かせるように思うし、実際

に生かしてみたいと思った。」

こうしたコメントをみるかぎり、「改善指導演」は研究保育の振り返りとして効果的な指導法であるように思われる。今後も取り入れてみたい。

### 3. その他の取り組み

研究保育実践以外の22年度の取り組みとして、教育実習事前事後指導、1年生の観察実習・夏期ボランティアについてふれておきたい。

#### (1) 教育実習事前事後指導—22年6・7月

教育実習事前指導は、一般的に学内の教員が学内で行うものであるが、22年度はこの点においても附属幼稚園との連携を図った。具体的な取り組みとして、教育実習直前にあたる6月3日の5限に短大430教室にて附属幼稚園の園長、教諭2名による特別講義を実施した。

園長からは、教育実習全般に関わる「心構え」についてコメントがあった。「園の方針に従うこと」、「園児と接する時に気をつけること」、「日誌を書く際の注意点」などが話の中心であった。

実習生の指導をこれまで何度も経験している教諭からは、実習生の指導者・評価者としての立場からのコメントがあった。「実習生には、澁刺さを期待したい。設定保育や一日実習のことが実習生は気がかりなのかもしれないが、個人的見解としては、日々子どもとのふれあいの様子や、教員・保護者とのコミュニケーションなどのほうがむしろ重要であり、指導者はそうした点を総合的に評価する。設定保育や一日実習ももちろん評価の対象にはなるが、それだけが保育ではないし、教育実習の中核ではないことを頭に留めておいてほしい」といった話があった。

22年3月に本学を卒業し、4月から附属幼稚園で勤務している教諭からは、一年前の自らの教育実習体験談が中心となった。「日誌や指導演に追われ、寝不足や体調不良でとても苦労したが、子どもたちにパワーをもらいそれが原動力となって実習を乗り越えられた。去年の教育実習の経験があったからこそ、まだまだ未熟ではあるが今こう

して幼稚園教諭として何とか働くことができてい

ることを実感している」という話があった。学生はこうした附属幼稚園の教員の話をもどのように受け止めたのだろうか。コメントをいくつか取り上げてみる。

「短大に入学してから何度か附属幼稚園を訪問しているの、園長先生や他の先生の顔と名前は知っていたが、実際にゆっくり話を聞く機会はなかった。面識のある先生方の話は安心して聞くことができた。先日、実習園にオリエンテーションでうかがった際は緊張しっぱなしだった。今日の話は、実習園で聞いた話と重複する部分もあったが、ゆったり落ち着いて聞くことができた。」

「教育実習での一番の心配事は設定保育と一日実習だ。自分で指導計画を立て、実践できるのかどうか不安でたまらない。たくさんの先生が見に来ると聞いているので実習が始まる前から緊張している。今日、附属幼稚園の先生が評価は何も設定保育・一日実習だけではないと話していただき、ちょっとだけ気が楽になった。」

「先輩の話が印象的だった。去年学内で見かけていた先輩が、今日はとても堂々とされていて感心した。そんな先輩も去年は教育実習で苦労していたと聞き、保育者になるにあたって教育実習は誰もが通らなくてはならない道なのだと言えることができた。」

学生にとって附属幼稚園の教員というのは、他の幼稚園の教員とはやや異なり身近な存在といえる。1年次から何度か幼稚園を訪問しており面識がある。そうした先生方から話を聞くことで、数ある本学の学外実習の中でもとりわけ不安でたまらない教育実習(杉原,2010)を控えて多少リラックスできるといった効果があるようだ。また、自分の一学年上の先輩の話というのは、より身近なこととして受け止められるようである。

研究保育その他の教育実習事前指導をへて学生は教育実習に臨んだ(6月7日～7月3日)。教育実習終了後の事後指導もまた事前指導同様に極めて重要となるが、22年度は事後指導においても附属幼稚園との連携を図った。

本学科では、教育実習後に実習生・学科スタッフで教育実習反省会を行うことを恒例としている。実習園ごとに実習の反省点を発表し、発表の合間に教員がコメントを加えるという形式で実施してきた。22年度は7月15日4・5限に短大130教室にて開催した。22年度の新しい試みとして、この反省会に附属幼稚園側にも参加を求め、園長、教諭3名の参加があった。事前指導の際にも学生にコメントした教諭が附属幼稚園の実習生の発表の後にコメントを加えた。主には実習生への労いの言葉であった。また、他の園での実習生に対しても「発表内容を聞きながら、それぞれに苦労しながらも頑張ってきた様子が伝わってきた。実習前に自分たちが話したことが少しでも役立っていたのならこんなにうれしいことはない。教育実習で学んだことを今後に生かし、保育者を目指して欲しい」と言葉をかけた。

このように事前事後指導に附属幼稚園が加わることで、単に実習を依頼する側、受け入れる側という関係でなく、実習教育をきっかけとして保育者養成教育に連携して取り組んでいるという意識を大学・附属幼稚園双方が持つことができる。そして学生も、附属幼稚園がより身近な存在となり大学との連携関係を実感することができるだろう。大学・附属幼稚園が教育上において連携するのは学生のために他ならない。学生にとって両者の連携関係が実感できるものとなる必要がある。

## (2) 1年生の観察実習・夏期ボランティア—22年7～8月

本学の保育者養成カリキュラムでは、1年生は9月に最初の実習(保育実習Ⅰ(保育所))を迎えることになる。学内で学んだ知識・技術を事前に確かめる機会が必要だと感じ、2年前より第一筆者担当の保育実習事前指導科目「保育実習の研究」の枠で、7月に附属幼稚園での観察実習の機会を設けている。当初は一度に訪問する学生の数が約20名と多かったため、子どもたちとじっくり関わることができなかった。一度に訪問する学生の人数を徐々に減らすようにし、22年度は8人までと

した。

約1時間程度の短い観察実習ではあるが、実習後の学生のコメントをみると「子どもたちと関わることができて楽しかった」、「子どもたちのパワーに圧倒された」、「約1時間にも関わらず汗びしょりになって大変だった」などあまりに素朴な感想が多いのに驚かされる。子どもたちと関わる機会が普段ないのかと推測し、聞いてみると凶星であった。大学で専門的な学習を積んでいるからには発達段階の確認や言葉がけについて学んで欲しいという思いがあるが、普段子どもと接していないと素朴な感想が先行してしまうのかもしれない。今後は、前期中に1度だけでなく複数回観察実習の機会を作る必要があるであろう。

さらに、22年度からの新しい試みとしてあげられるのは附属幼稚園での夏期ボランティアである。8月中幼稚園は夏休みであるが、ここ数年は預かり保育で毎日約30名の園児が登園してくる。この機会を利用し、希望者にはボランティアとして保育補助に入ってもらった。

ボランティアは1年生から募ることにした。教育実習を経験した2年生のほうが幼稚園側は助かるかもしれないが、とにかく子どもと関わる機会を増やす必要のある1年生にこのボランティアを生かしてもらいたかった。

夏期ボランティアのメリットとしては、子どもとの関わりに慣れることはもちろんのこととして、幼稚園の夏期預かり保育の状況、夏季保育特有の一日の流れを学べることだろう。夏期中でありプール指導があるし、一日預かりの園児には幼稚園でも午睡の時間がある。年少児から年長児までの異年齢混合保育も学ぶことができる。こうした学習は9月から始まる保育所実習の事前学習として大いに期待できる。実際、ボランティアを体験して実習に臨んだ学生は、実習先から高い評価を得ている傾向が見受けられる。今後も、このような機会を作っていきたい。



おわりに一今後に向けて

以上、かけ足ながら22年度の主に前期の取り組みを振り返ってみた。

ここで、「はじめに」であげた21年度の取り組みで見出された課題二点をもう一度取り上げてみたい。第一に「研究保育実践をより効果的にするためには、大学・附属幼稚園による協働的な計画性が極めて重要であること。具体的には、事前の観察実習機会の確保、事前事後指導体制の整備などである。」、第二に「研究保育を計画する前提として大学・附属幼稚園が保育者のあり方・目指す保育者像などについて協働的に構想する必要があること。附属幼稚園側から提案された事例研究などが構想の場として考えられる。」であった。22年度を振り返ってみると、第一の「協働的な計画性」に関しては、多少の改善は図れたように思われる。観察実習機会の確保については、大学側の拙速さによりいまだ不十分にとどまっているが、事前事後指導体制については学生・幼稚園・大学三者間の関係が少しずつ形成されているといえよう（もちろん十分とはいえないが）。

問題は第二の課題である。研究保育の前提としての「大学・附属幼稚園が保育者のあり方・目指す保育者像について協働的に構想する」という点については、甚だ不十分といわざるをえないのが現状である。3月の意見交換会の場で附属幼稚園側から要望された、事例研究の場への短大教員の参加がいまだ実現できていない。教育上の連携については改善に向かっていくといえるが、研究上の連携という意味ではスタートがきれたとはいえない状況である。

ところで、大学と附属幼稚園が研究面で連携することは必ずしも容易でないという指摘がある。無藤隆ら（無藤ほか，2004）によれば以下の4点が問題となる。

#### ①連携関係が表面的に終わりやすい

大学の教員の多くは教育実践現場への関心が薄い。また、基礎志向である多くの大学教員と教育実践の直接的な改善を目指す附属教員の間共通

の関心の研究テーマが見つかりにくい。データ収集や文献の検討等において研究の方法論がかなり異なる。

#### ②附属の教員の研究者としての位置づけが足りない

附属学校の教員には研究時間や研究費が乏しい。それに見合って、研究者としての自覚が乏しい。さらに、論文を書くことが評価されない。

#### ③大学の研究者の論文となりにくい

附属学校との連携による、特に実践的な研究は、大学教員側にとっては学会誌論文としてまとまりにくい。それはつまり、多くの学会で評価されるタイプの研究になりにくい。また、実践的な研究を大学内で評価する慣行が確立していない。

#### ④連携のための組織が弱い

ほとんどの大学では研究や研修のための連携を狙う組織がないか、実質的に機能していない。そのため、連携の推進が個別の教員の熱意に依存する。多くの教員にとってはまた大学の報告上も連携を形だけ組んでよしとする傾向が強い。

ここには本学にとっても重要な指摘が含まれている。例えば①について。本学幼児保育学科のスタッフ全員が、教育学・保育学を基礎理論としているわけではない。幼稚園や保育所の現状について専門的な理解があるわけでもない（保育者養成を行う学部・学科いずれも同じような状況にある）。となると、附属幼稚園の事例研究に参加することのできる教員が実は限定されてしまう。22年度、現時点（11月末）で事例研究に大学が参加することができていない直接的な理由は、附属幼稚園で事例研究が行われる日（大抵は水曜の午後）事例研究に参加できる（そのような専門性を持つ）教員が授業のため都合がつかないことにある。

とはいえ、そうしたスケジュール的なことを理由に事例研究への取り組みを凍結させるわけにもいかない。実は、今なすべきはスケジュール調整というわけでもない。スケジュールが合い、大学から教員が参加するだけで事例研究が充実すると

ということではないだろう。まずは、事例研究の方法を大学・附属幼稚園で検討することのほうが重要である。現在附属幼稚園で行われている事例研究は、その日の発表担当者がエピソードを紹介し、その場面について自由に意見交換をするという形式が取られている。しかしながら、エピソード紹介といってもそう単純ではない。鯨岡峻（鯨岡，2005）の検討をみればわかるように、エピソード記述をとってみてもいくつもの方法・考え方があ。現時点で、大学から附属幼稚園で行われている研究会に参加できないのであれば、記述法を大学・附属幼稚園で統一することで、紙上参加という形式をとることが可能となるのではないか。①では、共通のテーマが見つかりにくいこと、研究の方法論がかなり異なることが指摘されているが、事例研究の場合はエピソード記述法が重要なカギを握っており、例えば鯨岡のテキストを手がかりとして統一を図ることは難題とは思えない。いずれにせよ、事例研究の方法を煮詰めていく作業が必要であり、これは22年度中の課題といえる。

最後に④について。本稿は、22年度の本学と附属幼稚園との連携の取り組みについての報告であったが、もちろん「大学の報告上」、「連携を形だけ組んでよしとする」ものではない。教育上の連携は学生のためであり、研究上の連携は幼稚園・大学双方のためである。22年度の取り組みを報告した本稿は、21年度と比較して教育・研究上の連携における成果が得られたのかどうか、そしてまた23年度に向けてどのような取り組みをすればいいのかを検証・展望するための試みであった。

#### 引用文献 (References)

- 鯨岡峻，エピソード記述入門—実践と質的研究のために，2005，東京，東京大学出版会。
- 無藤隆・岩立京子・倉持清美・西坂小百合・森下葉子・青木総子，保育者研修において附属幼稚園が果たす役割—幼児教育未来研究会を通して，子ども発達教育研究センター（旧子どもの発達研究センター）紀要，2004，1，1-11。
- お茶の水女子大学「幼保プロジェクト」，お茶の水女子大学「幼・保の発達を見通したカリキュラム開発」中間報告書 大学コミュニティにある保育実践と学生の学びをつなぐ—保育カリキュラム研究と保育者養成カリキュラム研究の相互的展開をめざして，2008。
- お茶の水女子大学「幼保プロジェクト」，お茶の水女子大学「幼・保の発達を見通したカリキュラム開発」最終報告書 大学コミュニティにある保育実践と学生の学びをつなぐ—保育カリキュラム研究と保育者養成カリキュラム研究の相互的展開をめざして，2010。
- 杉原徹，本学幼児保育学科における実習指導の課題—学生のコメントを手がかりとして，高知学園短期大学紀要，2010，40，45-55。
- 杉原徹・小島一久，保育者養成校と附属幼稚園との連携のあり方に関する研究—教育実習事前指導重点化のための試みを通して，高知学園短期大学紀要，2010，40，57-68。

---

**Report**

---

## **Cooperation between a Junior College and a Kindergarten Attached to the College: Approach in the 2010 Academic Year**

Toru SUGIHARA<sup>1\*</sup>, Kazuhisa OJIMA<sup>2</sup>

**Abstract:** This paper is the report about cooperation between Kochi Gakuen College and Kochi Kindergarten(a kindergarten attached to this junior college)in the 2010 academic year. On the basis of problems in the 2009 academic year, in 2010, this junior college and Kochi Kindergarten had a meeting to exchange views in March, and cooperated for the study class in April and May, the preliminary and follow-up guidance on teaching practice in June and July, the observational practice and volunteer work in July and August. Cooperation in education was improved in a lot of points, and students recognized the value of this cooperation. On the other hand, Cooperation in research is still not good enough. Future problems are to deepen cooperation in education more, and to improve cooperation in research with establishing the methodology of the case study.

**Key Words:** a junior college, a kindergarten attached to the college, preliminary and follow-up guidance on teaching practice, a study class, a case study

---

<sup>1\*</sup> Kochi Gakuen College, Department of Early Childhood Education and Care, E-mail: sugihara@kochi-gc.ac.jp

<sup>2</sup> Kochi Gakuen College, Department of Nursing, E-mail: ojima@kochi-gc.ac.jp